

第6章 ヤコウガイの利用と交易

第1節 奄美諸島における6世紀から8世紀のヤコウガイ利用の実態

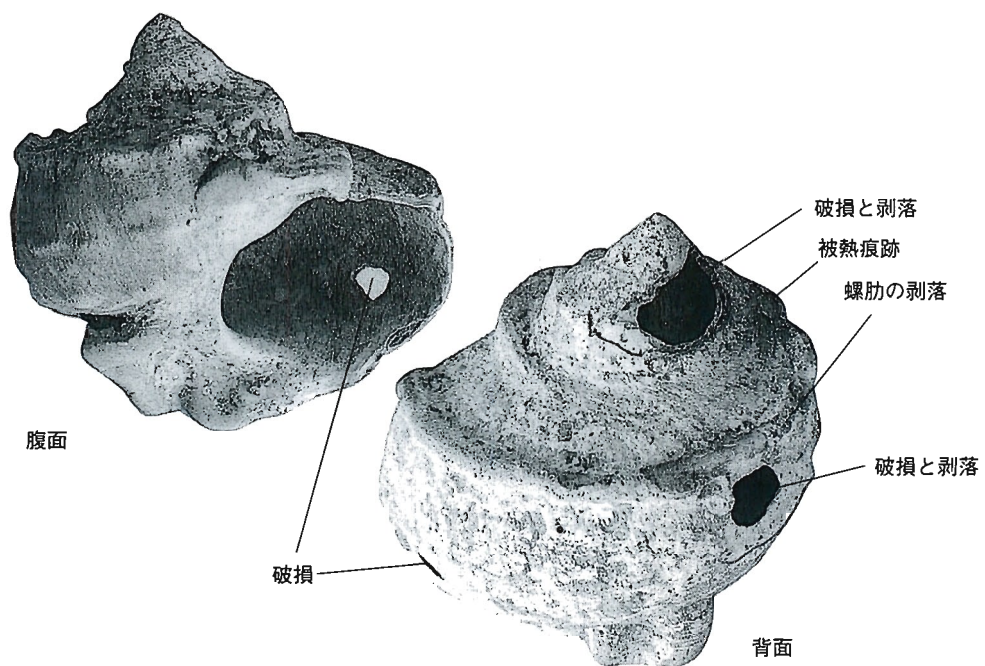
—マツノト遺跡出土のヤコウガイ分析を中心に—

第2節 ヤコウガイ交易の可能性

—6～8世紀の奄美大島3遺跡の分析—

付論 マツノト遺跡第1文化層、用見崎遺跡3層、安良川遺跡の先後関係

—ヤコウガイデータ分析のための基礎作業として—



マツノト遺跡出土ヤコウガイ（大型）

奄美諸島における6世紀から8世紀のヤコウガイ利用の実態

— マツノト遺跡出土のヤコウガイ分析を中心に —

西野 望
矢掛町教育委員会

NISHINO Nozomi
Board of Education
Yagake Town

0. はじめに

筆者は以前、琉球列島のヤコウガイ利用について考察した⁽¹⁾際に、6世紀以降の琉球列島においてヤコウガイ利用に大きな変化が生じたと考えた。この変化を具体的に追究するためには当該時期のヤコウガイ利用について、詳細な分析を行うことが課題として残っている。今回の調査ではマツノト遺跡出土のヤコウガイすべてを観察・計測し、奄美諸島における6～8世紀のヤコウガイ利用の実態を把握し、当該時期の人々の経済活動の動態を探っていきたい。尚、ヤコウガイの各部名称については第6章第2節木下図2を参照していただきたい。

1. 出土点数ならびに殻の大きさ別によるヤコウガイ利用の実態

(1) 殻の大きさ別出土点数

遺跡から出土する殻は部分的に欠損しているものが多いため、最も残存率の高い殻口と次体層の接点と、殻頂（殻頂を欠損するものについては螺軸の中心）の水平距離（図1）を計測することで大きさの統計をとった（セ計測値）。表1はその結果で、グラフ化したものが図2である⁽²⁾。

表1 大きさ別出土点数		
セ計測値 (mm)	出土数 (個)	うち被熱 個数
～10	0	0
～15	7	0
～20	63	1
～25	99	1
～30	108	3
～35	112	4
～40	117	13
～45	158	56
～50	184	81
～55	148	71
～60	38	18
～65	7	4
～70	1	0
～75	0	0
合計	1042	252

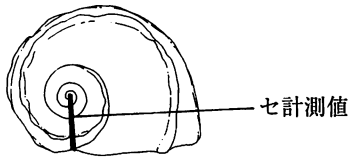


図1 ヤコウガイ計測位置

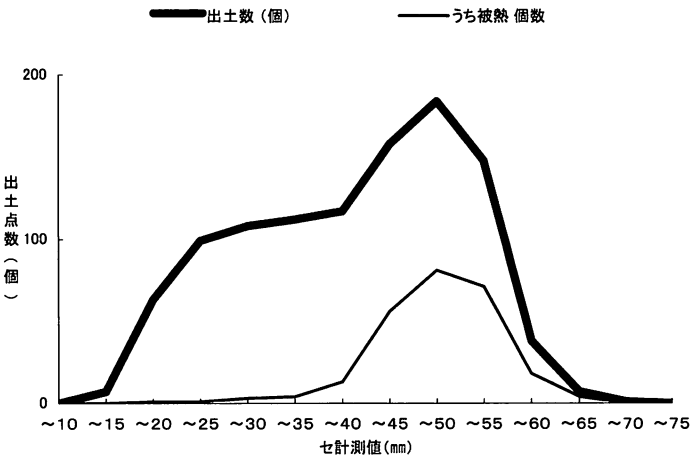


図2 ヤコウガイの大きさ別出土分布

これをみると、マツノト遺跡で出土したヤコウガイは主にセ計測値（以下同じ）20～40mmと45～55mmの2つのグループに分けられる。しかし、採集する際に大きなものほど目に留まりやすいことを差し引いて考慮するとセ計測値20～40mmの比較的小さな貝の出土量が全体の約5割を占めることが特徴のひとつとしてあげられる。つまり、マツノト遺跡人たちは大きさの別なくヤコウガイを採集していたと考えられる。また、このうち被熱の痕跡を残すものは45～55mmのグループに限って多くみられるため、大きなものほど焼いて食糧にし、被熱痕のない小さなヤコウガイについては「ゆでる」などの合理的な調理方法の違いがあったのではないかと推測される。ここでマツノト遺跡から出土したチョウセンサザエ114点を無作為に抽出し、観察したところ被熱痕のあるものは一点もみられなかった。また、分析対象とした1,321点のうち被熱痕のあるものは263点で、全体の約2割を占める。大きさ別に被熱痕の有無を見た場合、セ計測値45mm～55mmの大きさのものにより多く被熱痕がみとめられたがこれらでも出土数の約5割に観察できたにすぎない。

ところで、出土した殻の中には欠損が著しく、計測できなかったものが279点含まれる。このうち螺塔からの大きな割り取りによって計測できなかったものは203点で、これらのほとんどが縫帯肋をよく発達させた大型の貝であったことを付け加えておきたい（これについては後述する）。

(2) 出土点数からみたヤコウガイ利用

殻の個体数1,228点に対し、蓋は788点が出土しており、出土比率は6：4である。ここで注意したいのは、殻の出土数が蓋の出土数を大きく上回る点である。表2は分析対象のヤコウガイのうち、殻はセ計測値をもとに、蓋は最大径をもとに殻径を復元した⁽³⁾ものを大きさ別に集計したもので、これをグラフ化したものが図3である。これをみても復元殻径9～17cmにおいて、殻の出土数が蓋を上回ることがみてとれる。この理由としては①蓋だけが遺跡外に持ち出された、②殻だけが遺跡内に持ち込まれた、③調査区外に蓋だけが集積してありみつからないなどの特殊事情の3点が考えられるが、①については蓋が製品素材として価値をもつとは考えにくいので可能性は低い。②については螺鈿などの素材としての利用が考えられる。③については類例がないので、③の可能性も低い。私は②のヤコウガイの殻のみが遺跡外から持ち込まれた可能性を考えたい。

表2 ヤコウガイの大きさ別出土数②

復元殻径 (cm)	殻 (個)	蓋 (個)
～7	7	118
～9	94	44
～11	127	58
～13	166	58
～15	167	57
～17	265	100
～19	168	186
～21	37	35
～23	8	0
23.1～	2	0
合 計	1041	656

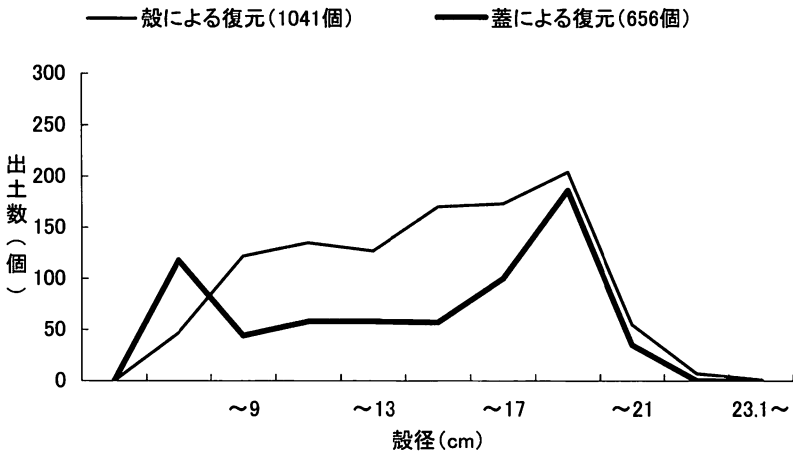


図3 ヤコウガイの大きさ別出土分布②

(木下尚子氏作図)

(3) 出土点数ならびに殻の大きさ別によるヤコウガイ利用の実態

出土点数ならびに殻の大きさ分布からみたマツノト遺跡のヤコウガイ利用の特徴をまとめると次のようになる。

- ①殻と蓋の出土割合は6：4で、殻の出土量が多い。つまり、殻と蓋の多くは一对のまま遺跡内に持ち込まれ消費されたと思われるが、殻の一部はそれだけが遺跡外から持ち込まれた可能性がある。
- ②出土した殻の多くはセ計測値20～40mmと45～55mmの2つの大きさのグループに分けられ、うち20～40mmの比較的小さな貝が全体の約5割を占めることからマツノト遺跡人たちは大きさの別なくヤコウガイを採集していたと考えられる。
- ③食糧としてのヤコウガイは被熱痕の有無から大きいものと小さいもので調理方法に違いがあったと推測される。
- ④被熱の痕跡を残すものは全体の2割である。また、大きさ別にみた場合、ピークのひとつであるセ計測値45～55mmに被熱痕の割合が多いが、それでも出土数の約5割にすぎず、残りの5割に食糧残滓以外の利用方法があったと考えられる。

2. 殻の割り取りについて

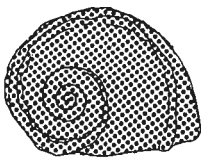
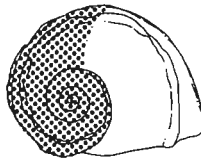
(1) 分類

遺跡から出土するヤコウガイの主たる利用法は、①食糧残滓、②製品製作用あるいはその残滓、③交易品あるいは交易品の残滓であると想定し、殻の割り取りから表3のように分類をおこなうことでマツノト遺跡におけるヤコウガイ利用の実態を把握しようと考えた。なお、交易品とは螺鈿の原材を想定している。ヤコウガイは食糧や貝匙など製品素材として縄文時代から近世にいたるまで琉球列島の人々に普遍的に利用されているが、殻が大きく、厚みのある真珠層をもつヤコウガイにしかない特質を最も活かした利用方法は螺鈿素材であると私は考えている。螺鈿の技術が成立し、素材としての需要が高まったことで、以前とは違うヤコウガイの価値が琉球列島の人々の間で広まったと考えられる。さて、交易品としての原材を供給地から消費地へ運ぶには、①原材をそのまま運搬する、②加工して運搬するの2通りが考えられる。『正倉院宝物（螺鈿、貝殻）材質調査報告』⁽⁴⁾によると、螺鈿の工芸品では「ヤコウガイの殻のいかなる部分も全く無駄なく利用し」、「ヤコウガイの蓋或いは未成殻を原材としたと思われるものは皆無で、殻の厚い老成殻のみを用いている」。また、琉球王府の螺鈿製作を担っていた御細工所跡⁽⁵⁾から出土するヤコウガイの多くは体層を大きく欠損している⁽⁶⁾。以上からみると、交易に使われたヤコウガイには、大きな貝が加工されぬまま消費地に運ばれた可能性と、粗加工された大きな破片が運ばれた両方の可能性がある。以下これについて両面から検証していきたい。

(2) 分析

表3の分類にしたがって集計したものが表4である。表4をⅠ～Ⅴ類の大分類で集計したものが表5で、出土割合をグラフ化したものが図4である。これをみると、欠損部位別による割合はⅢ類：殻口から大きく割りとるものが33%で最も多く、ついでⅣ類：体層の途中を欠損するものが32%、Ⅰ類：体層を残すもの25%、Ⅱ類：殻口から体層の半分ほどを割りとるもの9%、Ⅴ類：特殊な欠損をするもの1%の順で多い。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類で出土数全体の90%を占めるため、マツノト遺跡のヤコウガイ利用は主にこれら3類型に集約されているといえる。

表3 割り取りと利用に関する分類

割り取りのパターン	欠損する部位 ^(注1)	推測される利用方法	* () 内は対応する製品 ^(注2)
I：体層を残すもの  (I-i)	i 完形	食糧残滓・製品製作用・交易品	
	ii B	食糧残滓・製品製作用・交易品	
II：殻口から欠損するもの  (II-iii)	i D	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品)	
	ii BD	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品)	
	iii AD	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品・貝匙)	
	iv ABD	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品・貝匙)	
III：殻口から大きく欠損するもの  (III-i)	i ACD	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品・貝匙)・交易品残滓	
	ii ABCD	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品・貝匙)・交易品残滓	
IV：体層途中を欠損するもの  (IV-iii)	i A	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品・貝匙)	
	ii AB	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品・貝匙)	
	iii AC	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品・貝匙)	
	iv ABC	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品・貝匙)	
	v C	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品)	
	vi BC	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品)	
V：特殊な欠損をするもの  (V-i)	i CD	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品)	
	ii BCD	食糧残滓・製品製作残滓 (有孔製品)	

注1 欠損部位の分け方は右図を参照のこと。本章第2節木下図3とも対応する。
注2 ヤコウガイ製品の名称については各報告書で違いがみられるため、ここでは「有孔製品」とはヤコウガイの殻に孔をうがったもの、「貝匙」とは殻の体層を用いた容器状・匙状を呈するものを全てを含めた。

** 模式図凡例 白抜き：欠損部分 網掛：残存部分

〈参考〉

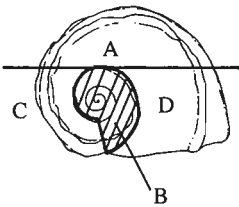


表 4 欠損部位別出土点数①

欠損部位別分類			被熱痕あり	被熱痕なし	小計	合計
I 体層を残すもの	i 完形		44	137	181	331
	ii B		54	96	150	
II 殻口から欠損するもの	i D		1	20	21	119
	ii BD		0	8	8	
	iii AD		9	32	41	
	iv ABD		7	42	49	
III 殻口から大きく欠損するもの	i ACD		3	145	148	430
	ii ABCD		17	265	282	
IV 体層途中を欠損するもの	i A		21	58	79	426
	ii AB		44	44	88	
	iii AC		13	37	50	
	iv ABC		27	80	107	
	v C		5	28	33	
	vi BC		16	53	69	
V 特殊な欠損をするもの	i CD		0	4	4	15
	ii BCD		2	9	11	
合計			263	1058	1321	

表 5 欠損部位別出土点数②

欠損部位別分類	被 熱 痕		計
	あり	なし	
I 体層を残すもの	98	233	331
II 殻口から欠損するもの	17	102	119
III 殻口から大きく欠損するもの	20	410	430
IV 体層途中を欠損するもの	126	300	426
V 特殊な欠損をするもの	2	13	15
計	263	1058	1321

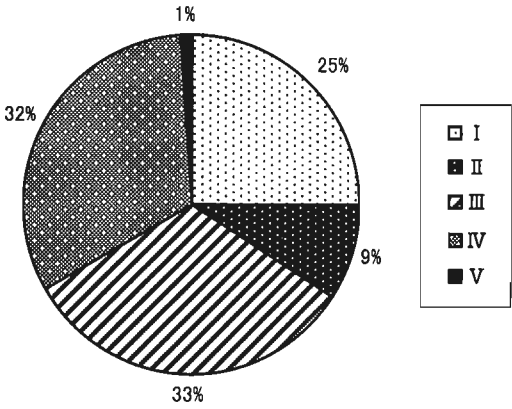


図 4 欠損部位別出土割合

さてここで、割り取りとは別に殻のどの部分に被熱痕があるかを調べた結果、体層中央部（A）：227点、螺塔（B）：12点、体層奥部（次体層付近）（C）：76点、殻口付近（D）：41点で、体層中央部に圧倒的に多く被熱の痕跡がみとめられた。これはヤコウガイの殻口を上にしてつば焼きにした場合、火をうける最も合理的な部位である。つまり、比較的大きなヤコウガイに被熱痕が多いのはつば焼きにして食されたと考えてよい。また、どの割り取りにおいても割合の違いはあれ、被熱痕をとどめるものがみられることからヤコウガイの多くはまず食糧として利用されたと考えられる。図 5 は I ～ V 類について被熱痕有無の割合をグラフ化したものである。もっとも被熱痕の割合が高い I ・ IV 類はと

もに被熱のものを3割程度含む。対してⅢ類に被熱痕をとどめるものは1割以下で、Ⅰ・Ⅳ類に比べて、Ⅲ類は食糧以外に利用する方法があったのではないだろうか。

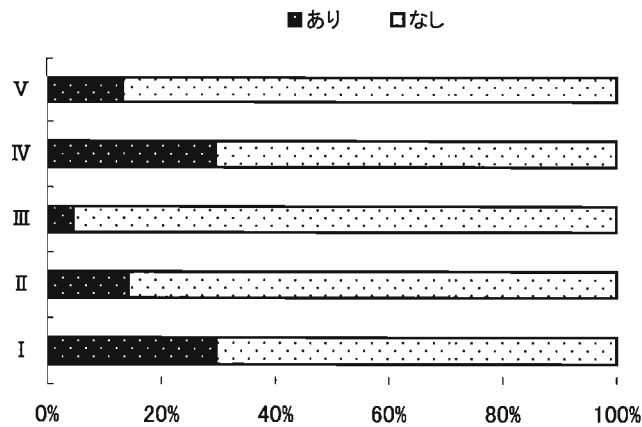


図5 欠損部位別被熱痕有無の割合

さらに、割り取りの分類をセ計測値の大きさ別に集計したものが表6である。これをグラフ化したものが図6・7である。図6をみるとⅠ・Ⅳ類はセ計測値30mmから60mmまでにふたつのピークをもつものの、どの大きさのヤコウガイも一定量の出土があるが、これに対してⅢ類はセ計測値50mmのみにピークがある。つまり、Ⅰ・Ⅳ類に比べて、Ⅲ類のように殻口から大きく体層を割り取るものには比較的大きなヤコウガイがとくに多く利用されており、殻の大きさを選択性がうかがえる。

表6 欠損部位・大きさ別集計表

セ計測値 (mm)	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ	
	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
～15	0	2	0	1	0	0	0	3	0	1
～20	0	15	0	5	1	9	0	32	0	1
～25	0	41	0	4	0	9	1	44	0	0
～30	1	35	1	16	0	11	1	41	0	2
～35	0	34	2	15	0	18	2	38	0	3
～40	2	23	2	19	0	27	8	35	1	0
～45	17	24	7	12	4	39	28	26	0	1
～50	34	28	2	11	2	37	42	24	1	3
～55	36	24	2	6	4	22	29	25	0	0
～60	7	5	1	3	1	6	9	6	0	0
～65	1	1	0	0	1	1	2	1	0	0
～70	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
不明	0	1	0	10	7	231	4	24	0	2
小計	98	233	17	102	20	410	126	300	2	13
合計	331		119		430		426		15	

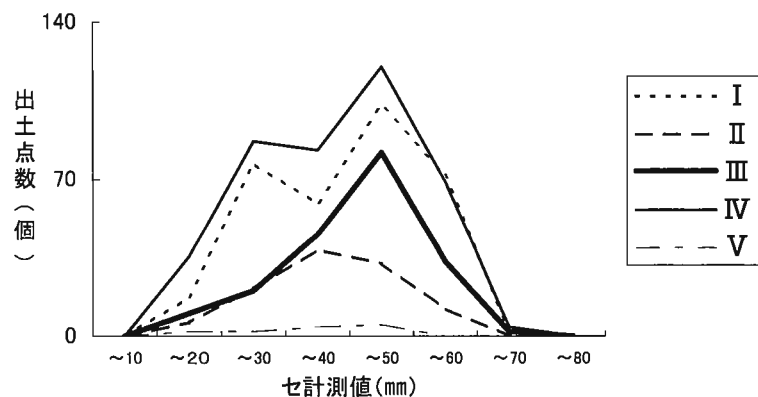


図6 大きさ別出土点数の推移

図7-1~3は、I・Ⅲ・Ⅳ類をそれぞれ、被熱痕の有無に分けて、セ計測値の大きさ別にグラフ化したものである。これをみると、I・Ⅳ類は大型の貝に被熱痕が多く、前述したように小型の貝との間に調理方法の違いがみとめられるとともに、大型の貝もほぼ半数が食用として使用されていたことが分かる。対してⅢ類はどの大きさのものをとっても被熱痕をもつものが少なく、食糧残滓以外の用途が推測される。

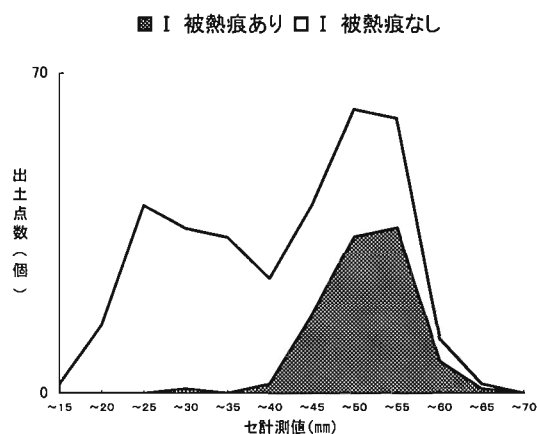


図7-1 I類の大きさ別出土点数の推移

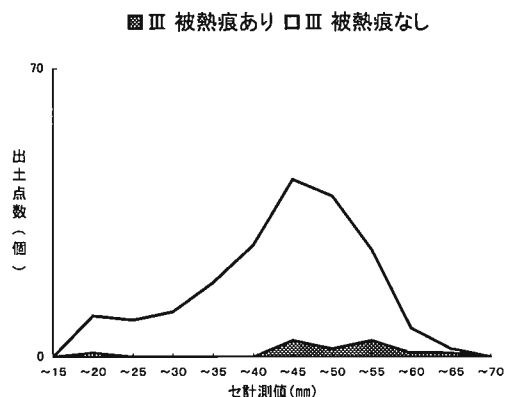


図7-2 Ⅲ類の大きさ別出土点数の推移

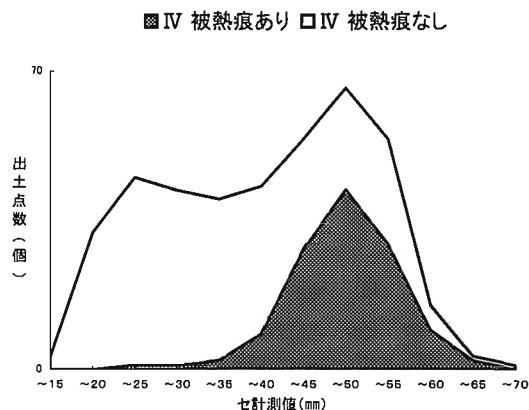


図7-3 Ⅳ類の大きさ別出土点数の推移

また、Ⅲ類には螺塔からの大きな割り取りにより、セ計測値を得られなかった個体が203点含まれる。これはⅢ類の出土数の約半数を占め、観察ではこれらの多くは縫帯肋をよく発達させた大型の貝であった。Ⅲ類には大型の貝が突出してみられることはさきに指摘したが、計測できなかったものを含めて考えると、殻口から大きく割り取るものには大型の貝がより選択的に使用されていた可能性が高い。

(3) 殻の割り取りからみたヤコウガイ利用

殻の割り取りからみたマツノト遺跡のヤコウガイ利用の特徴は以下のとおりである。

- ①完形を含め、体層を残すもの（Ⅰ類）・体層途中を割り取るもの（Ⅳ類）・殻口から大きく割り取るもの（Ⅲ類）が全体の90%を占め、マツノト遺跡の割り取りパターンはこの3類型に集約できる。
- ②Ⅰ・Ⅳ類は被熱痕がそれぞれの3割、Ⅲ類は1割以下あり、Ⅰ・Ⅳ類はⅢ類にくらべて食糧としたものの残滓が多いといえる。
- ③Ⅰ類の体層を完全に残すもの、Ⅳ類の体層途中を割り取るものには小型から大型の貝までみられるのに対し、Ⅲ類の殻口から大きく割り取るものには大型の貝が突出して多く、殻の大きさに選択性がうかがえる。またⅢ類には大きさ全体をとおして被熱痕を有するものが極端に少ない。
- ④正倉院の宝物材質調査によると螺鈿には「ヤコウガイの殻のいかなる部分も全く無駄なく利用し」ているとの報告があるが、螺鈿の製作工程上、平坦面の多い体層部分が最も利用しやすいと考えられる⁽⁷⁾。また、「ヤコウガイの蓋或いは未成殻を原材としたと思われるものは皆無で、殻の厚い老成殻のみを用いている」との指摘もあることから、ヤコウガイのⅢ類の出土状況は螺鈿の原材を運搬するために、大型の貝の体層を大きく割り取って島外へ持ち出した可能性がある。しかし、現に螺殻が正倉院に伝わっている事実もあるため、ヤコウガイには加工せぬまま持ち出されたものと殻口から大きく割り取った体層部分を持ち出したものの両者が存在したと思われる⁽⁸⁾。

3. 小結～マツノト遺跡のヤコウガイ利用～

マツノト遺跡出土のヤコウガイ利用について特徴をまとめると次のようになる。

- ・食糧としてヤコウガイを大きさの別なく採集し、また、殻の大・小で調理方法に違いがあったと推測される。
- ・被熱痕のある殻は全体の約2割で、調理法の違いを考慮し最も被熱痕の割合の高いセ計測値45～55mmを観察しても、出土数の5割にすぎず、残りの5割に食糧以外の利用方法があったと推測される。
- ・殻と蓋の出土割合は6：4で、出土した殻の一部は外部から持ち込まれた可能性がある。
- ・欠損状況に着目すると体層を大きく割り取るものには大型の貝を利用するという選択性が存在する。つまり、大きな殻ほど体層を大きく割り取る傾向にある。

同様の傾向は用見崎遺跡⁽⁹⁾でもみとめられる⁽¹⁰⁾。ここで、マツノト遺跡からは貝符・鉄製品などが出土し、島外の人々と盛んに接触していた様子がうかがえる。これらのヤコウガイは主に琉球列島内にとどまるヤコウガイ製品として利用されたことも否めないが、製品に対応される以上の貝殻の出土から、この時期に製品製作だけでなく交易品としてヤコウガイが利用されていたと考えられる⁽¹¹⁾。その際、貝はそのほとんどが体層部分を大きく割りとった状況で持ち出されていたと推測される。

最後にヤコウガイは波の荒いリーフの外側の崖面に生息する貝である。幼貝はリーフ内でみかけることもあるらしいが、採集には危険が伴う。また螺鈿には大きな殻を用いるため交易品としての価値

は小型の貝にはない。しかし、マツノト遺跡人たちは小型のものも含めてこの貝を採集しており、まず食糧としてヤコウガイを捕獲し、その中で比較的大きな殻を交易品として利用していたのではないかと考えられる。また、殻の出土数が蓋の出土数を大きく上回るため、マツノト遺跡では他から殻を持ち込み、集積する交易センター的な役割を担っていたのではないだろうか。

4. 安良川遺跡のヤコウガイ利用について

安良川遺跡は笠利半島東海岸北部の砂丘上に位置する兼久式土器期の単純遺跡である。2003年4月から5月にかけて、笠利町教育委員会によって調査がおこなわれた⁽¹²⁾。調査面積は300m²である。調査報告書によるとヤコウガイの殻および蓋の出土点数は破片も含め1,330点である。うち殻が破片も含めて636点、蓋が694点で、調査区のほぼ全面から検出されている。

表7 ヤコウガイの大きさ別出土数（安良川遺跡）

復元殻長（cm）	殻（個）	蓋（個）
～7	16	242
～9	51	67
～11	56	59
～13	28	51
～15	19	45
～17	12	52
～19	10	86
～21	5	15
～23	0	0
合計	197	617

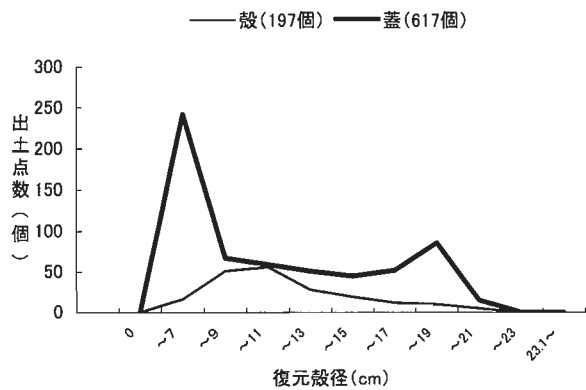


図8 ヤコウガイの大きさ分布（安良川遺跡）
（木下尚子氏作図）

さて、安良川遺跡から出土したヤコウガイについて、マツノト遺跡と同様の方法で計測・観察をおこなった⁽¹³⁾。結果、ヤコウガイの最小個体数は殻237点、蓋530点であった。殻と蓋の出土割合はおよそ3：7で、マツノト遺跡の出土割合が6：4で殻の出土が多かったのに対し、安良川遺跡では蓋のほうが多く出土している。

表7は、殻はセ計測値をもとに、蓋は最大径をもとに、対応する殻の殻長を復元し⁽¹⁴⁾、大きさ別に出土点数をまとめたもので、図8はこれをグラフ化したものである。これをみると、復元殻長（以下同じ）11cm以下の小型の貝の出土が多いことが安良川遺跡の特徴である。とくに9～11cmの小型の貝は殻と蓋の出土数がほぼ1：1で、この大きさの貝が安良川遺跡内で消費されたと考えられる。また、復元殻長19cmの殻は出土数が少ないのに対し、これに対応する蓋は8倍以上の出土があり、大型の貝の殻だけが遺跡外へ搬出されたといえる。大型の貝のみが遺跡外へ持ち出されたという状況は、マツノト遺跡において大型の貝が外部から持ち込まれた状況と相対応する。

また、復元殻長7cmに対応する蓋が突出して多く出土しており、これに対応する殻が出土していない点に疑問が残る。この傾向はマツノト遺跡でもみとめられ（図3）、この解釈についてはオカヤドカリの影響を考慮しても現時点では説明しがたく、今後の課題としたい。

5. 奄美諸島における6～8世紀のヤコウガイ利用の実態について

本論では、ヤコウガイ利用について食利用と交易に主眼をおいてのべた。これは、「螺鈿」という前代にはない技術が当該時期に成立し、ヤコウガイに新たな価値が付加されたことによる。ここで、

マツノト遺跡、安良川遺跡の分析結果をふまえると、当該時期の奄美諸島におけるヤコウガイ利用の特徴について以下のことがいえる。

- ①マツノト遺跡・安良川遺跡では、大きさの区別なくヤコウガイを採集する傾向にある。小湊フワガネク遺跡でも小型のヤコウガイが出土しており⁽¹⁵⁾、採集の際に目についたものを食糧として捕獲した可能性が高い。
- ②ヤコウガイはまず第一に食糧の目的で採集されたが、その中で比較的大きな貝殻を交易品として利用したと推測される。交易品としての大型の貝は、未加工のままのものと大きく割り取った体層部分のものが搬出された、両方の可能性がある。
- ③ヤコウガイ利用に関して、当該時期の奄美諸島の遺跡には殻を搬入する遺跡、殻を搬出する遺跡、遺跡内で採集と消費がおこなわれる遺跡が存在する。
- ④奄美大島北部には6～8世紀に比定される「ヤコウガイ大量出土遺跡」⁽¹⁶⁾が複数存在する（表8・図9）。とくに笠利半島東海岸沿いを中心に交易センター的役割を担う遺跡が複数存在したと思われる。

謝辞：この論文を作成するにあたり以下の方々にお世話になりました。深く感謝いたします。

木下尚子先生、中山清美先生、石堂和博氏（南種子町教委）、新里亮人氏（伊仙町教委）中村友昭氏（熊本大学院生）、清水恒志氏・高平愛子氏（熊本大学学部生）、笠利町歴史民俗資料館の職員のみなさん、大島北高等学校生徒のみなさん

註（1）藤江望「琉球列島におけるヤコウガイ利用の動向—紀元前4000年紀から紀元800年まで—」『南島考古』第19号 2000年。

（2）セ計測値と殻径・殻長の大きさは比例関係にあるのを前提とする。

（3）殻長の復元方法については本章第2節木下論文を参照のこと。

（4）和田浩爾・赤松蔚・奥谷喬司「正倉院宝物（螺鈿、貝殻）材質調査報告」『正倉院年報』第18号 1996年。

（5）金武正紀『御細工所跡』那覇市文化財調査報告書第18集 那覇市教育委員会 1991年。

（6）木下尚子氏教示。

（7）中里尋克「古代螺鈿の研究（上）」『國華』第1199号 1995年。中里尋克「古代螺鈿の研究（下）」『國華』第1203号 1996年。螺鈿の製作工程において、ヤコウガイなどの原貝を幅5 cmほどの平板に加工する必要がある。

（8）小湊フワガネク遺跡では、ヤコウガイ3個体分の破片を集積した遺構が検出されている。高梨修氏は、これら3個体はすべて接合し、貝匙や有孔製品など従来のヤコウガイ製品を製作する意図とはかけはなれていると指摘している。高梨修「（予察）小湊・フワガネク（外金久）遺跡におけるヤコウガイ貝殻利用の実態」『サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流—ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学—』第2回奄美博物館シンポジウム資料 1999年。

（9）中山清美『用見崎遺跡』笠利町文化財報告第20号 笠利町教育委員会 1995年。山田康弘・原田範昭編『用見崎遺跡』熊本大学考古学研究室報告31 1995年。若杉竜太・尾上博一編『用見崎遺跡Ⅲ』熊本大学考古学研究室報告32 1996年。若杉あずさ編「Ⅰ 用見崎遺跡Ⅳ」『熊本大学考古学研究室報告』第33集 1997年。

（10）辻村美代子「Ⅰ 用見崎遺跡Ⅳ ヤコウガイ」『熊本大学考古学研究室報告』第33集 1997年。註（1）。

（11）筆者は以前、ヤコウガイの割り取りについてはすべてが製品製作によるものだと考えていた。しかし、その後、ヤコウガイの殻を観察する中で、被熱痕をとどめるなど、どうしても製品製作に使われたとは考えがたいものが一定量含まれることや、琉球列島内でのヤコウガイ製品の出土状況から殻の割り取りと製品製作を即座に結びつけることは困難であると考えを改めた。

表 8 6～10世紀の奄美諸島ヤコウガイ大量出土遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	立地	時期	殻	蓋	文献
1	用見崎遺跡	笠利町用字見崎	砂丘	飛鳥～奈良	265	65	註(9)
2	安良川遺跡	笠利町用安良川	砂丘	兼久式期	237	530	註(12)
3	マツノト遺跡	笠利町字宿字マツノト2117	砂丘	弥生～平安	1288	788	註(17)
4	泉川遺跡	笠利町万屋2252	砂丘	古墳後期～平安	○	○	註(18)
5	長浜金久第Ⅰ遺跡	笠利町和野長浜金久	砂丘	古墳後期～平安	○	○	註(19)
6	小湊フワガネク遺跡	名瀬市小湊外金久	砂丘	飛鳥～平安	○	○	註(20)

○：個体数未詳

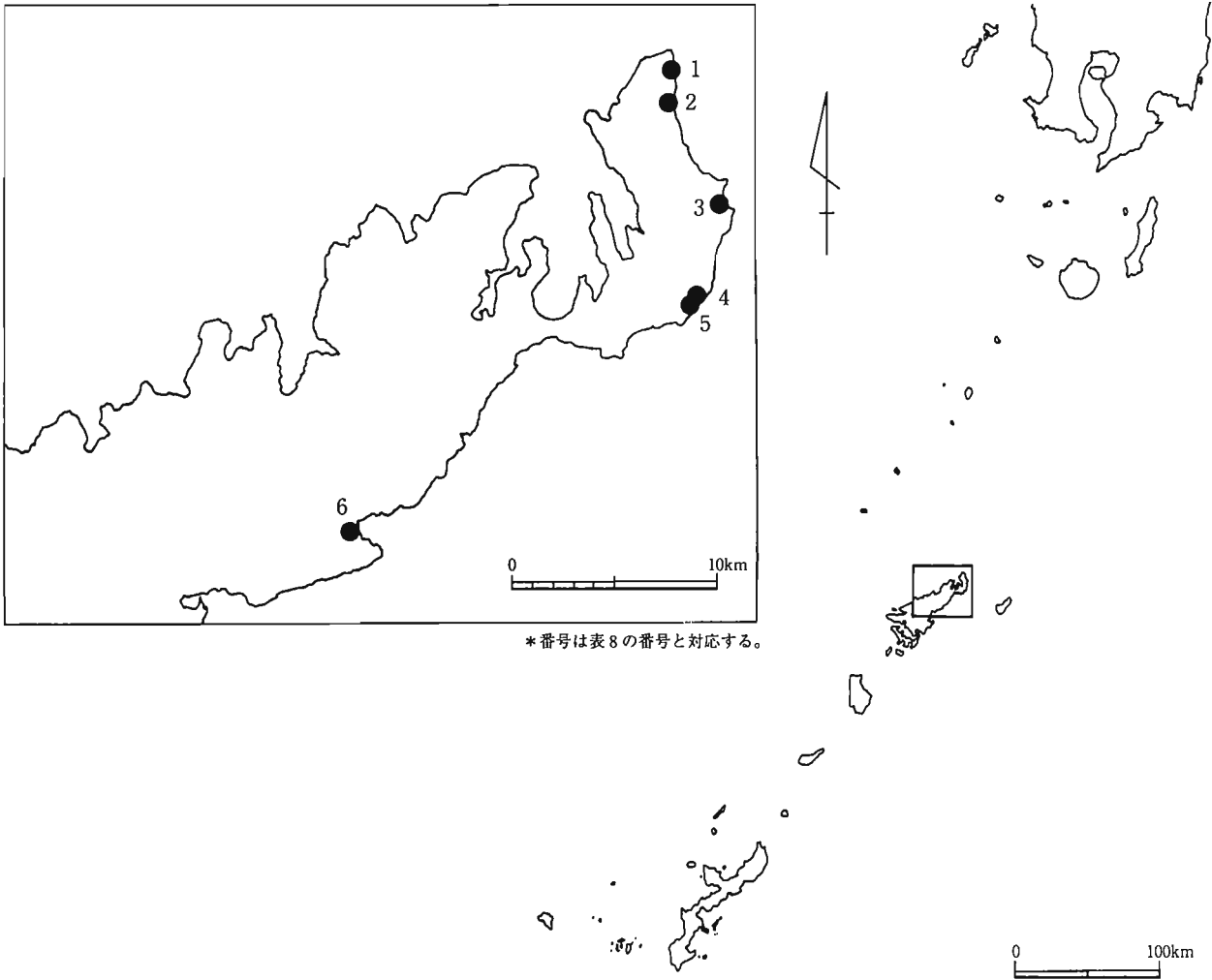


図 9 奄美諸島ヤコウガイ大量出土遺跡分布図

- (12) 中山清美『安良川遺跡』笠利町文化財報告書第27集 笠利町教育委員会 2005年。
- (13) この調査成果は、2005年12月5日におこなわれた木下尚子氏の調査による。また表6、図6の集計・作図についても木下氏がおこなったもので、氏のご厚意により本論文に掲載させていただいた。
- (14) 殻長の復元方法については本章第2節木下論文を参照のこと。
- (15) a 高梨修「(予察) 小湊・フワガネク (外金久) 遺跡におけるヤコウガイ貝殻利用の実態」『サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流—ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学—』第2回奄美博物館シンポジウム資料 1999年。b 古島久子「南島におけるヤコウガイ利用に関する一考察—奄美大島名瀬市小湊フワガネク (外金久) 遺跡出土資料の検討—」琉球大学考古学研究集録 創刊号 琉球大学法文学部考古学研究室 1999年。
- (16) 註 (15) a
- (17) 中山清美「マツノト遺跡の発掘調査」『奄美考古』第4号 奄美考古学研究会 1996年。
- (18) 立神次郎編『泉川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (39) 鹿児島県教育委員会 1986年。
- (19) 弥栄久志他編『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (32) 鹿児島県教育委員会 1985年。
- (20) 高梨修『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群遺跡範囲確認発掘調査報告書』名瀬市文化財叢書4 名瀬市教育委員会 2003年。



写真1 ヤコウガイ計測作業 (2005年4月30日)



写真2 調査メンバー (2005年5月1日)